

自然冷熱エネルギー



ひがし北海道からの提言

釧路大規模総合食糧備蓄基地構想から

寒冷地北海道と、ひとくくりには語られることが多いのですが、それぞれの地域に住むひとびとがよく知っているように、多雪、寡雪、温暖、寒冷とさまざまな地域の気候の特性をもっています。冬季に2〜3回除雪が必要なだけの道東地域と、それを日常的に必要とする地域などの違いのように、地理的・経済的な背景がそれぞれの地で異なり一律に論議することができないのは、いままでもないことではないでしょう。道東の中心的な都市、釧路地域は、このようになかなかあって、「霧の街」の湿った印象と異なり、客観的には年間の日照時間は東京、鹿児島、那覇のいずれをも凌駕していて、冬の日数の8割が快晴、年平均気温は5.7度と日本で最低、積雪の保温効果が期待されない20cm未満の日数は札幌が釧路の3倍、帯広が2倍などといった特徴を持つてい

ます。釧路食糧備蓄基地研究会は、このような気候特性を釧路地域のプラス面と捉え、北太平洋に位置する国際港湾機能、国内有数の水産・酪農基地などの立地条件を生かし、本地域に食糧備蓄高次加工基地の形成実現を図るために必要な調査・研究を行うことを目的として、民間学からなる構成メンバーをもって、昭和63年11月（1988年）に設立されました。研究会では会の発足当初から釧路地域の冷涼な気候特性に注目し、その大規模食糧備蓄倉庫への利用形態をさぐる目的で、ヒートパイプを利用した永久凍土低温貯蔵庫の研究と題した講演会（平成元年2月）、帯広畜産大学の実験施設見学（平成元年7月）、網走市エネルギー開発利用モデル事業施設等の現地見学会（平成2年7月）などの事業を実施しています。さらにヒートパイプの実験も釧路市で行い、その実験報告（平成2年5月）「食糧備蓄」も行なわれています。釧路地域の自然エネルギー利用のありかたとして、ヒートパイプと太陽電池パネルは、かかすことのできないツールといえるでしょう。このように設立以来、活動状況（表1）に示すとおり、その現実的展開へむけての調査・研究を重ねるとともに、公開講座やセミナーの開催、そして研究誌の発刊などにより食糧を備蓄することの国家的重要さや釧路地域の持つ特性がその備蓄にいかんにかんがわれるかなどを提言しています。すなわち、平成11年4月に、この研究会発足から10年を総括したかたちで発刊された「食糧備蓄」は、「『港と食が拓く国際交易都市・釧路』への提言」の表題で、それまでの研究成果が6つの提言（左ページ図）としてまとめられています。

を総合的かつ計画的に推進し、もって国民生活の安定向上及び国民経済の健全な発展を図る。」と明記されています。これまでの研究成果、6つの提言を示す方向と、国の食、農に関する理念の転換の方向がみごとに一致しているのをそこにみとることができることができます。この研究会では引き続き研究を推進し、平成12年には、大規模総合食糧備蓄基地構想の展開調査報告書、その概要版も発刊され、理念から具体的な内容に立ち入る作業にとりかかることとなりました。どのような研究が行われているかは、「食糧備蓄」の目次がその内容を端的に示しているので紹介します。（左ページ）

釧路食糧備蓄基地研究会の主張

将来的な食糧需給の見通しは決して楽観できません。世界人口の爆発的増加に対し、食糧生産には限界がおとずれ、そう遠くない将来に世界的な食糧需給の逼迫が懸念されています。また、先進国においては、食糧が過剰供給傾向にある一方、世界の慢性的栄養不足人口は現在でも数多く存在し、未だ食糧消費の格差は解消されていません。

釧路食糧備蓄基地研究会はこのような根本的な食糧問題を深刻に捉え、研究会の発足当初から、「本来あるべき食糧供給システム」とそのなかでの「先進国」「日本」「北海道」そして「釧路」の役割について考えてきました。そして、望ましい食糧供給の姿についての数多くの研究成果を公表してきました。そして研究会の考えを多くのひとに知ってもらうために、研究誌「食糧備蓄」21世紀の食糧安全保障に貢献する「釧路大規模総合食糧備蓄基地構想」などをまとめました。

当研究会発足当初は、このような趣旨の研究活動は「イナイ」なものでした。しかし研究を重ねて10年余をへた現時点では、当研究会の考え方が時代を先取りしたものであると自負しうるようになりまし

「食糧備蓄」の目次

構想の背景

- 1 世界の食糧事情
- 2 日本の食糧事情
- 3 日本の食糧流通の現状

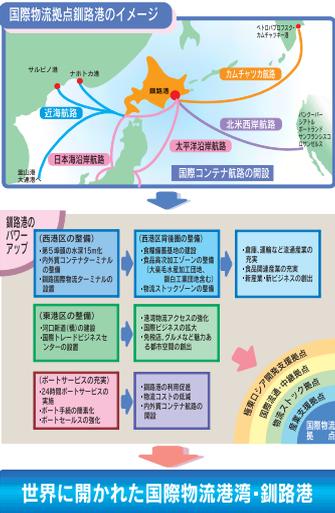
望ましい食糧安全保障体制

- 1 我が国の食糧安全保障体制確立の考え方
- 2 我が国における望ましい備蓄システム

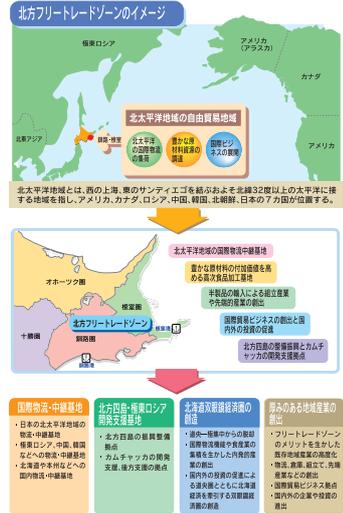
釧路大規模総合食糧備蓄基地構想

- 1 基地の機能とその役割
 - 2 基地形成に向けての課題と基地がおよぼす効果
 - 3 自然冷熱物流技術活用貯蔵施設のケーススタディ
 - 4 基地形成に対するひがし北海道・釧路の優位性
 - 5 構想がもたらす地域への効果
 - 6 基地展開のイメージ
- 構想を支援する地域戦略

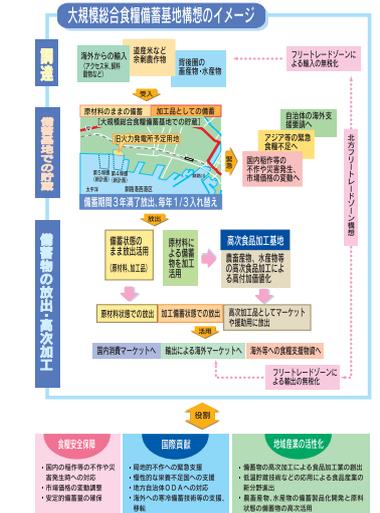
提言3 国際物流拠点釧路港の実現



提言2 北方フリートレードゾーンの実現



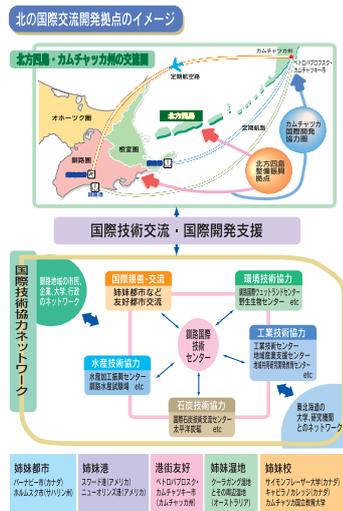
提言1 大規模総合食糧備蓄基地構想の実現



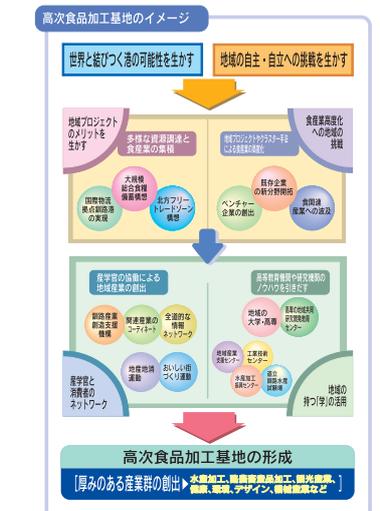
提言6 ひがし北海道の経済文化圏の実現



提言5 北の国際交流開発拠点の実現



提言4 高次食品加工基地の実現



た。そのことは近年になって、北海道では同様の問題意識をもった研究会が数多く発足し活動が展開されはじめていることがそのことを示しています。また直近の動向として、我が国では「国際備蓄基地構想」の検討を進めるに至っており、WTO農業交渉の日本提案にも盛り込まれることとなりました。北海道

を食糧の基地にという運動は、北海道各地に展開され統合の機運にもありますが、運動のベクトルをそろえるとともに各地の経済的、地域的な特徴をあまりすくなく、いかにすることが大切であると考えています。そのために、釧路食糧備蓄基地研究の長期にわたる研究成果が地域はもとより、日本の、そして世

開催年月日	活動内容
平成13年11月	シンポジウム「21世紀の食糧事情と食糧備蓄を考える」
平成13年3月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成12年3月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成11年12月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成11年4月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成10年12月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成10年6月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成9年11月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成9年5月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成9年2月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成8年11月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成8年5月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成8年2月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成7年5月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成7年2月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成6年11月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成6年1月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成4年7月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成3年4月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成3年2月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成2年12月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成2年10月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成2年7月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成2年5月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成2年2月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成元年7月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成元年6月	研究誌発刊「食糧備蓄」
平成元年2月	研究誌発刊「食糧備蓄」
昭和63年11月	研究誌発刊「食糧備蓄」

界の食糧安定供給体制確立に少しでも役立つことを願うその実現に向けて活動を続けています。

釧路食糧備蓄基地研究会
座長 矢作 裕